

建久三年本『人麿集』から見えるもの

藤田洋治

はじめに

『人麿集』は、平安時代に歌聖・柿本人麿の家集として編纂されたもので、その収載している歌が『万葉集』人麻呂歌とは必ずしも一致しない、不思議なものとして取り扱わってきた。かつて後藤利雄氏は『人麿の歌集とその成立』^(注1)を著し、近年片桐洋一氏が『柿本人麿異聞』^(注2)を刊行して、平安時代以降の人麻呂像とその歌集についても言及しておられる。一方、『冷泉家時雨亭叢書 詞林采葉抄 人丸集』^(注3)において、新たな本文が紹介され、その一方で、島田良二氏が『人麿集全訳』^(注4)を刊行、その序において、歌仙家集の成立について概説しておられる。

この度、今までほとんど語られることのなかった建久三年本について考察したい。歌仙家集本の成立をも視野に入れて『人麿集』の本文をもう一度考えてみたいからでもあるが、もう一方で、冷泉家時雨亭文庫蔵の『人麿集』や「擬定家本」にも関わってくる問題を内包していると思われるからである。

一、『人麿集』の現存諸本

(イ)系統（冷泉家時雨亭文庫蔵『柿本集』系統）

c 書陵部藏（B 6・724）本系統

a 冷泉家時雨亭文庫蔵清誉本人麿集^(注5)・書陵部藏（510・12）本系統
b 正保版歌仙家集本系統

現在所在と本文が判明している家集だけで、このように本文上から分類されるのであるが、この中の流布本である第一類本は、さらに次のように細分される。

(イ)系統（散逸前西本願寺本系統）

東海大学蔵桃園文庫本・書陵部藏（511・2）本など。

(ロ)系統（正保版歌仙家集本系統）

現存諸本は、『冷泉家時雨亭叢書 詞林采葉抄 人丸集』における竹下豊氏の分類をまとめると、次のような四類となる。

このうち、b の歌仙家集本系統は、三〇一首本が歌数が最も多く、三〇一

首本に書陵部藏（506・8）本などが、三〇〇首本に広島大学藏本・内閣文庫蔵（201・434）本などがあり、正保版本は二九九首本、また山形大学藏本は二九八首本と、その収載する歌数に僅かな相違が見られる。

この度採り上げる建久三年本は、cの書陵部藏（B6・724）本（以下、「建久三年本」と略称する）である。

建久三年本は、奥書に「建久三千子年」という奥書があるための仮称であるが、この奥書を信すれば建久三年（一一九二）に書写された本を親本としたもので、歌仙家集本系統に見られる「建長五年（一二五三）」を遡る本文をもつことが考えられるのである。建久三年本は、歌数が二九九首、上巻・中巻・下巻の三巻構成で、しかもやや崩れてはいるが定家様で書写された江戸中期の写本である。

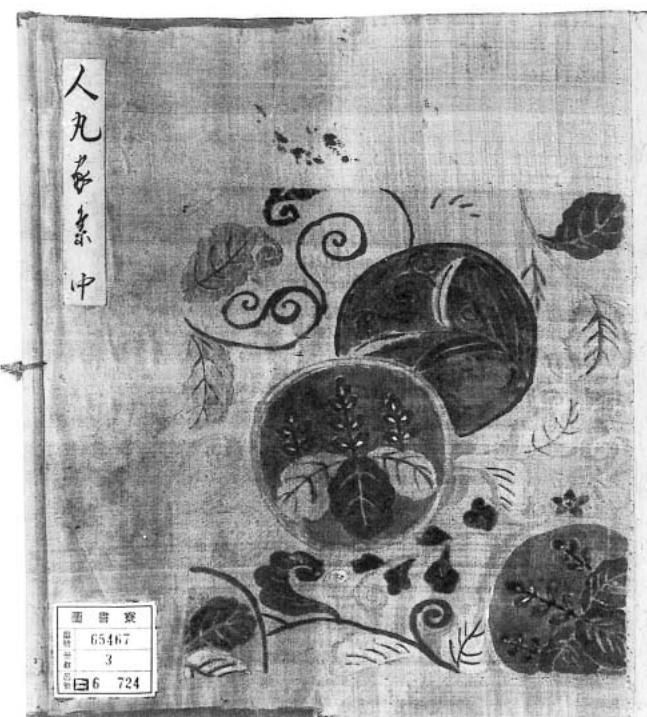
当該伝本は、巻子本で、外題は「人丸家集 上」「人丸家集 中」「人丸家集 下」とある。巻軸は紺に金糸の布貼。表紙は布、縦二四・六cm、横二一・三cmの大きさで、丸に七五の桐などの書き文様がある。料紙は楮、全体に染色が施され、色はほぼ栗色。また書写された後に漉かれたらしく文字の上に紙の纖維が載っている箇所もある。和歌は一首一行書き、詞書は和歌よりほぼ二字下げで書写されている。そして、その書風が定家様なのである。

さて、建久三年本はその収載和歌から第一類本であると考えられるので、この一類本の構成について触れておきたい。

上巻 + 下巻 + 国名隠題歌
1 ～ 64 65 ～ 235 236 ～
301

右に示したのは、『新編国歌大観』^(注6)に収録された「人丸集」の構成で、左の数字は歌番号である。(イ)系統は、一四一首で、上巻六三首、下巻一七八首。

この上巻のみが独立した形で伝存しているのが彰考館藏本で、この上巻部分に下巻が付加された形が(ロ)系統の本文である。その(イ)系統の形態に、「国名隠題歌」が付加した形態が(ロ)系統で、最も書写が古いと考えられる清誉本（『冷泉家時雨亭文庫藏清誉本人麿集』を以下このように略称する）では、三〇一首。この本文は、『冷泉家時雨亭叢書』の他、江戸初期の転写本・書陵



【図版一】建久三年本中巻の表紙



【図版二】建久三年本・上巻の奥書

23

大君をみかきの山を老にするほそ谷河の音のさやけさ

達人三五郎

【例四】
(本文は建久三年本)

毒ひだりとみかきの山のこへたと一あらき浜へ
とくに見ゆるを取ぬ(無断なうだ)

鳥(すずめ)の声の歌ひてとくとお聲(おとこゑ)あわせ
み出(みだれ)てとくとお聲(おとこゑ)あはせ(あはせ)

み出(みだれ)てとくとお聲(おとこゑ)あはせ(あはせ)
み出(みだれ)てとくとお聲(おとこゑ)あはせ(あはせ)
み出(みだれ)てとくとお聲(おとこゑ)あはせ(あはせ)
み出(みだれ)てとくとお聲(おとこゑ)あはせ(あはせ)

四行

の奥書がある。下巻は「ほの／＼と明石の浦の」から始まる八首で、後半に「国名隠題歌」を含み、奥書「建久三千字年」がある。収載歌は、全三九首、(回)系統・歌仙家集本系統とほぼ同じで、「九九首本の正保版本などとは一致する。大きな相違は、(回)系統に特徴的な集付や異文注記が建久三年本には全く見られないことである。

さらに、上巻の巻末部分が「山のかひそとも見えす」で終わっているように、本文は(回)系統に近いと考えられる。例えば、

【例一】
(本文は建久三年本)

ひきての采女身なくなる時よめる

天の子かみつの日に逢んひそおほのみしかは今もくやしき

53

54 さゝみなみのしかのから嶠行てみれと大宮人のふね待かねつ
に「國名隠題歌」を含み、奥書「建久三千字年」がある。収載歌は、全三九首、(回)系統・歌仙家集本系統とほぼ同じで、「九九首本の正保版本などとは一致する。大きな相違は、(回)系統に特徴的な集付や異文注記が建久三年本には全く見られないことである。

さらに、上巻の巻末部分が「山のかひそとも見えす」で終わっているように、本文は(回)系統に近いと考えられる。例えば、

【例一】
(本文は建久三年本)

ひきての采女身なくなる時よめる

天の子かみつの日に逢んひそおほのみしかは今もくやしき

53

54 さゝ浪のしかのつのゝかまかりにし河せをみればあはれなるかな

53 あめよかすこゝのつのかあはん日をおほのみしかは今そくやしき

近江の荒たる宮をみて

54 さゝ浪のしかのからさき行みれと大みや人の船まちかねつ

この部分は、(イ)系統では、次のように記載されている。
【例二】
(本文は書陵部藏(511・2)本)

ひきてのうねへ身なげゝる時よめる

52 さゝ浪のしかのつのゝかまかりにし河せをみればあはれなるかな

ひとつにいふしてのつらしか

この部分は、(イ)系統では、次のように記載されている。
【例二】
(本文は書陵部藏(511・2)本)

近江の荒たる宮をみて

54 さゝみなみのしかのから嶠行てみれと大宮人のふね待かねつ

となつており、(回)歌仙家集本系統は、建久三年本と同じように記載される。また建久三年本は(イ)系統の104番歌「秋霧のなびくをのゝ萩の花今やぢるるらんまだあかなくに」などももたず、(イ)系統の本文とは相違し、(回)系統の本文と一致することがわかる。

歌仙家集本系統と建久三年本の本文は、その形態を無視すれば、かなり近い関係にあることがわかる。次の例である。

【例三】
(本文は建久三年本)

6 秋風のいせのはま荻おりふせて旅ねかすらんあらき浜へに

初句は(イ)系統や(回)系統の清譽本では「かみがきや」であり、(回)系統・歌仙家集本系統でも内閣文庫(201・434)本や神宮文庫藏本・長野市真田本などでは「神風の」であり、「秋風の」の本文は正保版本・書陵部藏(506・8)本・陽明文庫藏(212・1)本・静嘉堂文庫藏(105・12)本、熊本大学蔵北岡文庫本・中田剛直旧藏本などがあるが、このような異文は(回)系統内部の相違なのである。次の例も同じような傾向を示している。

【例四】
(本文は建久三年本)

かはを

二句目「老にする」は、(回)系統のほとんどの伝本の本文「おひにする」に相当するはずであるが、(イ)系統や清誉本は「帯にせる」であり、(回)系統の中でも内閣文庫蔵(201・433)本は「おひにせる」なのである。しかも、この歌の表記「老にする」は、前後関係から「帯にする」の意であると思われるが、仮に定家筆本を想定した場合、このような表記が、その定家筆本にあつたかどうか、大いに疑問の残る用字なのである。もう一例掲げてみたい。

【例五】

(本文は建久三年本)

179 時雨のみにはふれゝはまきのはもあらそひかねて紅葉しにけり
180 青柳のかつらき山にゐる雲の立てもゐても君をこそ思へ

179 番歌では(イ)系統では上の句が「しぐれの雨まなくしふれは」であり、清誉本では、初・二句は一致するものの三句が「はぎの葉も」となり、続く180番歌では、(イ)系統及び清誉本では初句が「あしひきの」である。ここでも、(回)系統・歌仙家集本系統の本文と建久三年本とは本文が一致するのである。同じような例を列举することは避るが、建久三年本は、(回)系統・歌仙家集本系統の本文と近いことが判明するのである。

しかし、建久三年本には、次のような小さな独自異文も多い。

【例六】

(本文は建久三年本)

(1) 42 島みやのみかりの池の浜ちとり人めきらひて人におよりそ
(2) 50 ふすまちの引てに山の妹をゝきて山路を行はいけりともなし
(3) 128 かり金の鳴にしとにもから衣竜田の山はいろつきにけり
(4) 139 玉たすきかけぬ時たにわかこふるしくれしふらはぬれつゝもこん
176 竜田河紅葉ゝなかる神なひの三室の山に時雨ふるらん

が成立したものではないこと、そして版本などの異文注記を取り込んで作成された本文でもないことは判明するものと思われる。

逆に、(回)系統・歌仙家集本系統に見られる「建長五年」奥書の「書写本手跡古体也」に、この建久三年本が相当するか、と言えば、先に見た漢字表記や、同じく次に触れる漢字表記から、「手跡古体」に相当するか、疑問であり、かつ(回)系統・歌仙家集本系統には、二九九首本より歌数の多い伝本も多いので、建久三年本の祖本から「建長五年」奥書本へという流れは、成り立たないように思われる。

しかし、ここまで引用でも気つくように、用字において特徴があり、定家様ではあっても、定家自筆本を親本として想定することもできないと思われる。

【例七】 (本文は建久三年本)

(1) 11 ときゝぬのおもひみたれてこふれともなど中故と云人もなし
(2) 92 銀の河浅せしななみたければたゝわたりなんまでは未なし
(3) 95 白露のをかまくおしき秋萩のおりてみをりて沖やかくらん
(4) 158 夜を寒み麻戸を明て出ぬれば庭もはたらに雪降にけり

(1)は「汝がゆゑに」とある箇所、(2)は「すべ(術)なし」とある箇所、(3)は「お(置)きや」という箇所、(4)は「あさど(朝戸)を」とある箇所。いずれも表記から読むことは可能であるが、意味を取り違えやすい表記である。誤読を誘発するような表記が定家によってなされたとは考えがたい。やはり、定家様の伝本から、定家自筆本の存在へは結びつかないと考えられる。

建久三年本の形態、和歌配列、表記から、当該伝本の性格が少しづつ明らかになってきたように思われる。定家様で書写されているものの、定家自筆本にはたどり得ない伝本であること、本文は歌仙家集本系統のものであることが明らかになつたものと思われる。『擬定家本^{注2)}』の一連の伝本が定家に直接結びつかなかったことと同じ結果になる。未だに不明なのは、奥書と三巻本という形態である。

傍線部分が例えば正保版本では(1)が「人におよりす」、(2)が「ひくての山に」、(3)が「鳴にしともに」、(4)が「かけぬ時なく」、(5)が「時雨ふるらし」となる。一字の相違部分は、「り」と「る」など、かなり曖昧なものを含めると、さらに数は増える。しかし、伝本によつて一致・不一致も多様があるので、これ以上例示はしない。ただ、版本から集付と異文注記を抜いて建久三年本

三、三卷本といふ形態

それでは、三卷という形態と一巻という形態とのどちらが本来の形態であったのだろうか。奥書を信頼するならば、応保二年（一一六二）生まれの定家は勿論のこと、その父・俊成も七八歳で生存していた建久三年のほうが、建長五年（一二五三）より古い形態である可能性が出てくる。しかも、建久三年本は、定家様で書写されているのである。また建久三年は定家が三一歳で若すぎるようにも感じられる。

しかしながら、問題も残る。時雨亭文庫が公開されて、その叢書に收められた幾つかの『人麿集』には、この建久三年本の形態のものが存在しない。『擬定家本』という写本群も紹介されたが、その中にも建久三年本の親本は、見あたらない。

改めて、三巻という形態が本来のものなのか、という検証をしてみたい。

建久三年本は、和歌配列が、(回)系統・歌仙家集本系統とほぼ一致（正保版本や熊本大学藏北岡文庫本などとは全く一致）しながら、巻の形態を異にしている。歌仙家集本系統などの流布本『人麿集』の構造については、既に考察がある。その最初は山崎節子氏^(注)である。山崎氏は、上巻をA群、下巻をB群（65番歌／165番歌）万葉集巻十所載歌、C群（166番歌／220番歌）伝承人麿歌群、D群（221番歌／225番歌）(イ)・(ロ)両系統に共通する増補歌群と四分し、その後に「国名隠題歌」が付いたものと把握しておられる。島田良一氏^(注)は、大まかに下巻を三分して、66番歌からが万葉集巻十後半、175番歌からが『拾遺集』を中心収録した部分、242番歌からが「国々の隠題歌」としておられる。片桐洋一氏^(注)は、山崎氏とほぼ同じ分類をしておられる。

このように、先行研究を見ていくと、(回)系統・歌仙家集本系統とほぼ同じ歌配列でありながら、建久三年本の三巻目の巻頭歌が215番歌であることが実際に不可思議な現象であると考えざるを得ないのである。大まかに三分しても、さらに四分した場合でも、この215番歌の位置に切れ目はこないのである。さらに、上巻六四首、中巻一五〇首、下巻八五首という歌数のアンバランスも気になるところである。

しかし、この215番歌が巻頭になることはあり得ると思われる。
215 ほのくと明石の浦の朝霧に島かくれゆく舟をしそ思ふ

片桐洋一氏^(注)も触れておられるように、公任が『和歌九品』で「上品の上」と最高の和歌とし「言葉妙にして、余りの心さへある」と評し、同じ歌を『前十五番歌合』で、赤人の「和歌の浦に潮満ちくれば」と番にして人麿歌として用いている。公任にとって人麿を代表する歌という扱いなのである。その後の『三十六人撰』や『三十人撰』にも選ばれていますし、『三十六人歌合』の人麿歌としても選入されることの多い歌なのである。

この歌をもって、人麿を代表したいという思いから、この歌を巻頭に据えるという工夫は、あっても不思議ではないと思われる。ただ、巻頭に据えようとした段階で、本来の二巻構成の家集を三巻に改編したと考えられる。家集の構造からは、元来ここに切れ目がなかつたはずなのである。

歌聖・人麿への尊崇の思いが、あるいは三巻本といふ形態を生み出してしまったのであろうか。

四、佐々木本の奥書

どうやら建久三年本は、本来の形態ではないと推測されるのであるが、なぜ定家様であったのだろうか。

実は、「建久三年本」は、もう一本存在する。親本とその転写本といふほど両者の関係は近い。佐々木孝浩氏蔵本である。今、両者の下巻の一部を並べてみた。一方は巻子本、もう一方は袋綴の写本ではあるが、酷似している。独特の用字法や改行位置までが一致するのである。親本とそれを忠実に転写したもののようによく似ている。両者の文字遣いから、同じ伝本を親本としてそれぞれ忠実に転写したと推測される。

佐々木本の装丁は、袋綴、一冊。江戸中期写。浅縹色艶出表紙で、縦二七・一センチ、横一九・六センチ。左肩に薄茶色の題簽があり「柿本人丸家集」とある。内題は「柿本人丸家集 上（中・下）」とあり、料紙は、斐楮交渉で、遊紙はなく、全二八丁。和歌は、一行書で、一面行数は八行。奥書は、

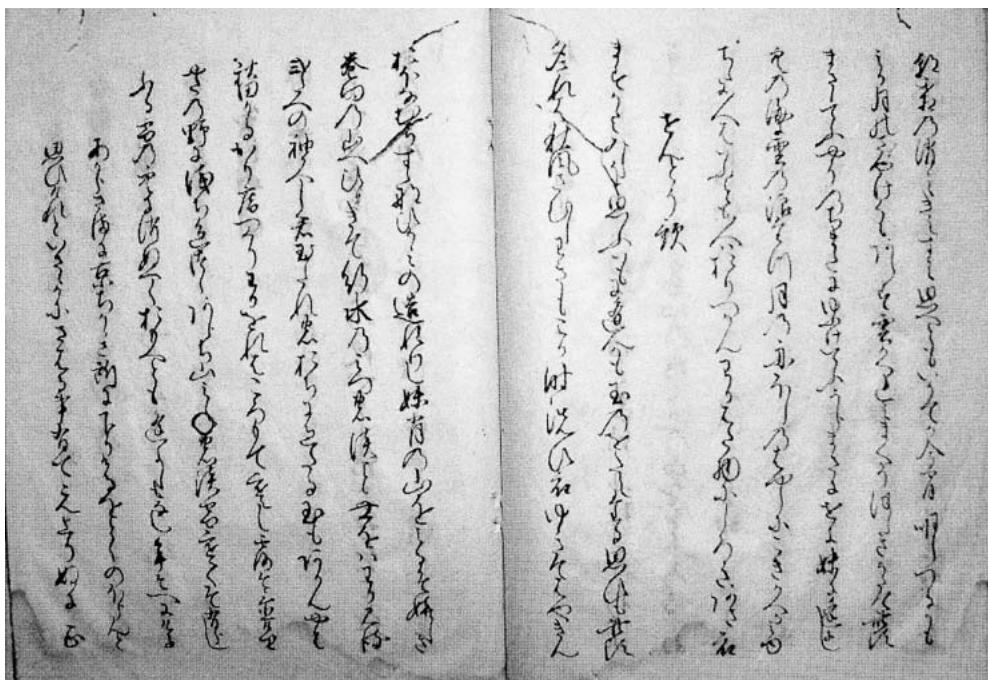
各巻末に「建久三年子年」とある。また、裏見返に奥書「大正十年一月三十
日冷泉伯爵ヨリ拝領 山上忠磨（花押）」とある。



【図版三】 建久三年本の本文

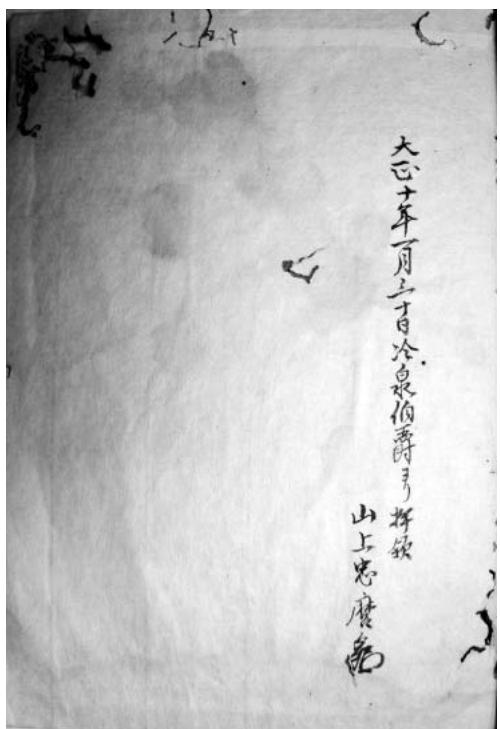
歌番号	1	2	3
42	16	6	42
詞	五	五	詞
或人にいはく	あひみそめけん	あらき浜へに	來人にいはく
来人にいはく	あひてそめけん	あかき浜へに	

【表一】 建久三年本と佐々木本の本文異同



【図版四】 佐々木本の本文

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4
187	183	163	159	147	143	135	134	125	122	121	116	111	108	106	105	98	92	92	88	60	45	44	44	43	43
二	四	五	四	五	四	四	二	二	四	四	初	二	二	初	五	五	五	二	四	詞書	二	左注	三	左注	詞
死ぬる物にし	ねにあらはれて	程そへにける	杣木をほさん	人にはられぬる	人にしきぬへくも	すきにぬへくも	ともしくもあらす	玉につくれる	手ふれわきもこ	いまはきなきぬ	わくことかたき	家居をせられは	山とひこゆる	秋はきは	花さきにけり	折てかさん	までは未なし	浅せしらなみ	年にまれらに	天にしほるゝ	みなわすれすと	せかませは	老に過ぬと	かへし	かえし
死ぬる物なし	りにあらはれて	程そへにける	杣木ををさん	人にはれぬる	人にしきぬへゝも	すきにぬへゝも	ともしくれあらす	玉につゝれる	手ふれるわきもこ	いまはきなきな	有ことかたき	家居されは	山とひかゆる	秋は	花そきに鳴	折てかさらん	までは未ふし	浅せしらなむ	しなたるくひ	てにしほるゝ	みちわすれすと	さかませは	遠きに過ぬと	かえし	かえし



【図版五】 佐々木本の奥書

43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30
285	278	273	268	247	247	242	235	234	231	228	226	223	190
四	五	初	三	三	初	四	初	詞	五	二	五	二	五
あはちはやふる	年をみてしか	夜とゝもに	おりてたつ	すまの浦に	なにをはりにて	ふる道に	え上らぬに	露そ置ける	すくなひかみの	思ひ茂此比	やそのちまたに	恋しわたれは	恋しわたれめ
あわりはやふる	年をみてかし	夜ともに	おふてたつ	すまの浦の	なにおわりにも	有道に	え上りぬに	露そ置けり	すくなひかみの	思ひも此比	やかのちまたに	恋しわたれめ	恋しわたれめ

49	48	47	46	45	44
299	293	291	288	287	286
四	詞	四	四	四	初
積る木の葉々	ふせ	こほるは	夜のまといひし	こすゑのみ	こすゑ

用字について先に触れたが、この【表I】の中でも、両者のあまりに近い関係は見ることができるはずである。

そして、佐々木本には、次の注目すべき書写奥書が見られるのである。

「大正十年一月三十日、冷泉伯爵ヨリ拝領 山上忠麿（花押）」とある。建久三年奥書「人丸家集」が、じつは冷泉家にあったのである。ところで、大正一〇年に、冷泉家から『人麿集』を「拝領」した山上忠麿とは、どのような人物であったのだろうか。恐らくは、明治一〇年に生まれ、加茂別雷神社、京都精華高等女学校などに勤務した、有職故実研究者の山上忠麿氏ではなかろうかと思われる。この山上氏であれば、有職故実の中に、それまで知られていなかつた冷泉家の故実を紹介しており、冷泉家の故実に造詣が深い人物である。例えば、昭和一一年に『冷泉家和歌所預『曲水宴』考証復元公演』を行なつたということなどが知られている。

冷泉家から、そのような山上氏に贈ったのが、建久三年奥書「人丸家集（佐々木本）」であったのである。

つまり、建久三年奥書「人丸家集」は、冷泉家に収蔵されていて、その転写本を、おそらくは近世期に定家様で記した人物がいたということである。その伝本は書陵部に所蔵されることとなつた。またもう一冊の転写本は、山上氏の手許を経て、佐々木氏の所蔵になつたということになる。

定家様という書風は、冷泉家の当主以外は使用できない制約があつたといふ。冷泉家の当主が、自ら書写し天皇家に寄贈したとしては定家様があまりに拙いようにも思われる。建久三年本は、冷泉家の当主の筆跡とは見がたいように思われるがよくわからない。

冷泉家には、この親本が存在していたのではなかろうかと推測するが、冷泉家の時雨亭文庫の調査によつて、ほとんどの伝本の存在が判明した現在、不思議なことにこの建久三年本の親本は、未だに出現していない。

さらに不思議なことがある。「擬定家本」は、近世初期に冷泉家時雨亭文庫蔵の伝本の転写作業の中でも特に重要視されていたと考えられるのだが、建久三年本の親本に相当する伝本は、転写されていない。想像となるが、この建久三年本は、この靈元天皇の書写活動以降のある時点で冷泉家の文庫に入り、また何らかの事情で移つていったものではなかろうか。その時点以前か不明であるが、転写本が一つは定家様で作成され、さらに一本の転写本が冷泉家で作成された。このうち、定家様の巻子本は、書陵部の所蔵となり、もう一方は佐々木氏の手に移つた。

想像を続けすぎるのであるが、このように考えると、見えてくるものがある。建久三年本が、なぜ巻子本という形態であるのか、なぜ奥書が三箇所にあるのか。奥書は、一般に作品の末尾にあるもので、各巻末に同じ奥書があること自体、不思議な現象であろうと思われる。さらに、巻子本で家集を作成するということも一般的ではない。普通ではないのである。特殊な装丁で、珍重・尊重すべき書風で、建久三年本は作成されているのである。前に触れたが、料紙は染料で古めかしい栗色に染められているのである。このように考へると、ある時点での建久三年本の親本を本物の定家自筆本と考えた人物がいて、一方は古色あふれる巻子本にしたのであろう。また、佐々木本もその本文を同じように尊重して、丁寧に書写したものではなかつたろうか。二つの「建久三年奥書「人丸家集」」の文字遣いを見ていると、そのような推測をしてしまうのである。

さらに、もう一つ、気になることであるが、歌仙家集本が何時、集成されたのか、という問題である。この定家様の建久三年本にしても、歌仙家集本の建長五年奥書本にしても、定家自身が関わっていないことが判明したと思われる。この建久三年本から歌仙家集本へという流れも、三〇〇首本など、二九九首本より歌数の多い伝本が多いのである。冷泉家時雨亭文庫蔵の『人麿集』の主なものは紹介され、そこには歌仙家集本系統のものは、本文をや異にする清音本以外になかつたのである。

五、建久三年本から

建久三年本は、定家様で書かれた『人丸家集』で、歌仙家集本系統の本文を三巻という形態で書写された「建久三年」の奥書をもつ伝本である。そして、この伝本の親本は、ある時期、冷泉家に存在していたと推定される。三巻という形態自体に無理があり、改編されたものと推測されるのであるが、「擬定家本」にも含まれなかつたこの伝本は、いろいろな疑問をかき立てるのであるが、おそらくは、歌聖・人麿を尊崇する立場から、「ほのぼのと明石」の歌を巻頭に置きたいという欲求で編集されたものではなかつたらうか。そして、さらに推測であるが、それを定家様で書写した伝本が作られていたのではないか。現存する二つの建久三年奥書『人丸家集』のあたりに近い漢字表記の一一致はそのことを物語るのではないか。

そして定家の閑知しないところで、この建久三年本も、当然建長五年本も作成され、歌仙家集本の編纂も行われたように思われるのである。

【翻刻編】

- 一、宮内庁書陵部蔵（B6・724）本を翻刻したものである。
- 一、翻刻には、原本の漢字、かななど、底本の表記のままとしたが、以下の諸点については、改訂を加えた。
- ①歌番号を付し、詞書は原本とほぼ同じ二字下げに統一した。
- ②繰り返し記号は、原本のままとした。
- ③漢字表記については、旧漢字は現行の表記に改めた。
- ④底本の空白部分は、同じほどの空白とした。
- ⑤底本では、和歌は一行書き。三句目の後を明けてはいない。また詞書は、原本のままの行替えとしている。

題簽　「人丸家集 上」

柿本人丸家集上

石見の国よりきける人に
いはみなる高間の山の木のまよりわかふる袖をいもみけんかも
秋山にちる紅葉ゝのしはらくもちりなみたれそ妹か邊りみん
いはしるの野中にたてる結ひ松こゝろもとけす昔おもへは
秋風のいせのはま荻おりふせて旅ねかすらんあらき濱へに
むらさきにほへる妹かかくしあらは人つまゆへに我こひめやも
みくま野ゝ浦のはまゆふもへなる心はおもへとたゞに逢ぬかも
朝ねかみわれはけつらしうつくしき人の手枕ふれてしまものを
夕されは君ぎませんと待し夜の名残そ今もいねかてにする
思ひつゝねにはなくともいちしく人の知へくなけきすな君
ときゝぬのおもひみたれてこぶれともなと申故と云人もなし
梓弓引みひかすみこすはこそこはこそをなそ余そに社見
玉ほこの道行つかれいなむしろ式ても人を見るよしもかな
とにかく物は思はすひたゞくみうつすみなはのたゞ一筋に
足曳の山田もる庵のをくかひの下こかれつゝわかこふらくは
すきたもてふける板まの逢さらはいかにせんとかあひみそめけん
難は人あし火たく屋はすゝたれと己か妻こそとこめつらなれ
いもかゝみうつをさゝのゝはなれ駒たはれにけらし逢はぬ思へは
天雲のやへ雲かくれなるかみの音にのみやはきゝわたるへき
さみの郎女相わかれ侍ける時の
思ふなど人はいへとも逢ことをいつと知てかわかこひさらん
近江より上りて宇治河のほとりにて
武士のやそうち河の網代木にいさよふ波のよるへしらすも
我せこをきませの山と人はいへと山の名ならし君もきまさす
かはを
大君かみかきの山を老にするほそ谷河の音のさやけさ
つき草に衣そゝむる君かため色とりころもすらんと思ひて
なをあらしことなし草にいふことをきゝてしあらはうれしからまし
山たかみ夕日かくれの浅ち原後みん為にしめゆはましを

みしまえの玉えの昔をしめしより已かとそ思ふいたからねと

月草に衣はすらん朝霧にぬれての後はうつろひぬとも
我こゝろゆたのたゆたにうきぬなはへにも沖にも成にけるかな

久かたのあまにはきぬをあやしくもわか衣手のひる時もなき
ゆふかけて祈るみむろの神さひていなにはあらす人め茂みそ

百つたひやすのしまへにこく舟に乗に心わすれかねつも
ことしけき里にすますはけさなきしかりにたかひていなまし物を

河のせにうつまくみれは玉もかる散みたれたるかはの舟かな
吉野ゝ山に御幸する時の

みれとあかぬよし野ゝ山のとこなめに絶る時なく又かへりみん
伊勢の国に御幸する時に京にとゝめられてよめる

みをうみにふな乗すらんつまともに袂のすそに塩みちぬらんかも
塩さひにつつの浦にこく舟にいも乗らんかあらき浜へに

たちはきのたぶさの末に今もかも大宮人のたまもかるらん
石見の国にめをゝきて上りてよめる

笪の葉ゝみやまもそよにみたるらんわれは妹思ふおきてきつれは
なみの宮のうせたる時

みやのみことのあれまくもおし
久かたの雨ふることに

赤ねさし日はてらせともむは玉の夜わたる月のかくらくおしも
或人にいはく

嶋みやのみかりの池の浜ちとり人めきらひて人におよりそ
はせのわう女をさかへの宮にたてまつる

式たへの袖かへしてし君やたれのうちのすきをまたは逢んや
ひとつにいはく老に過ぬと又有本にいはくはつせのわう
女にたてまつれるなり

飛鳥のわう女納る時によめる
飛鳥河しからみわたしせかませはなかるゝ水ものとけからまし

ひとつにいはくみんと思ふやまたみんと思ふらんわか大君
の御名をわすれぬひとつにいはくみなわすれすと
たけちのかみをしきのかみにかりにおさめたてまつる

ときのうた

久かたの天にしほるゝ君ゆへに月日もしらてこひわたるらん
式やみのみちのつゝみのかくれぬの行ゑもしらすこねりまとぬ
めのしにて後によめる

秋山のもみちをしなみまとひぬる妹をしむと山ぢくらしつ
しらすともまたひく道をしらすともすまちを行はゆけにともなし
しらすとも又いはく道しらすとも

紅葉ゝのちりぬる秋をたまつさのつかひをみればつかひ覚ほゆ
ふすまちの引てに山の妹をゝきて山路を行はいけりともなし
又いはく

こそみてし秋の月夜はやとれとも逢みしいもはいや遠さかる
家にいきてわかやをみれば玉さゝのほのかに置るいもかこまくら
ひきての采女身なくなる時よめる

天の子かみつの日に逢んひそおほのみしかは今もくやしき
近江の荒たる宮をみて

さゝなみのしかのから嶠行てみれと大宮人のふね待かねつ
天さかるひなのなかちを漕行は明石のとより家の邊りみゆ

みこの浦はよくこそ有らしいさりせる天の釣舟波のうへにみゆ
すまの浦に舟乗すらん乙女子かあかものすそに塩やみつらん
大ふねにまかちのしひにうな千鳥こきてゝわたる月ひと男

近江のみやの荒たるを見て

さゝなみやあふみ大津のうらはなのみして霞棚引え秋もいなん
讃岐のみゐのこしまにして、岩の上にてしにたるくひ
をみて

妻もあらはづみてたかましさみ山のとこのおはしきそきぬへしやは
石見の国にてなくなりぬへき折によめる

奥つなみよる荒磯の式たへのまくらと成てなれる君かも
いも山の岩ねにをけるわれをかもしらすていももか待つゝあらん

神山のいはねの玉に有われをしらぬか妹かまちつゝませる
山のかひそとも見えすしらかしの枝にも葉にも雪のふれゝは

建久三壬子年

題簽
「人丸家集 中」

柿本人丸家集中

人ことは夏野の草と茂くとも妹とわかとしたつさはりなは
山里は月日も遅くうつらん心長閑に紅葉ゝもみん
此ころの恋のしけらん夏草のかりはつれともおひしくかこと
かたよりに糸をこそよれ我せこか花立はなをぬかんと思ひて
郭公かよふ垣ねの卯花のうきことあれや君かきまさぬ
われこそはにくゝもあらめ我宿の花立はなはみにもこしとや
かけてのみ恋れはくるしなてしこの花にさかなん朝な／＼みん
余そにのみゝつゝやこひん紅の末つむ花のいろにいてぬと
夏草の露わけころもきぬ物をなとかわか袖のかはく時なき
みな月の土さへさて照日にも我袖ひめやいもにあはすて
恋る日はけなかき物を今夜さへともしかるらん逢へきものを
天の河こそのわたりのうつろへはかはせふまに夜そ更にける
年のかひ今夜つくして明日よりは常の恋にやわか恋をせん
あはすてはけなかき物を天の河へたつる迄やわかこひをらん
彦星と七夕つめとこよひ逢ん天の河せに波たつなゆめ
しは／＼もあひみぬいもを天河ふなてはやせよ夜の更ぬとき
秋風の清き夕にあまの河舟こきわたせ月ひとおとこ
天河霧立わたり彦星のかち音きこゆ夜の更ゆけば
天の河遠きわたりとなけれとも君か舟では年にこそまで
天の河はしうちわたすいもいかにやます通はん時またすとも
銀の河霧立わたらる七夕は天のはころもとひわかるかも
渡し守舟はやわたせ一年にふたゝひきます君ならなく
銀の河せをはやみかもむは玉の夜は更ゆけと逢ぬ彦ほし
87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65

天の河夜は更につゝさめる夜の年のまれにたゞ一夜のみ
七夕の今宵逢なはつねのこと月日へたつる年なからなん
秋風の吹にし日より天の河瀬に立てゝまつとつけこせ
天河こそわたりはあせにけり君かきません跡のこらなん
銀の河浅せしらなみたかけはたゞわたりなんまでば未なし
彦星の妻まつ舟の引綱のたえんと君にわかおもはなくに
いもに逢と君また待と久かたの天の河原に年そへにける
白露のをかまくおしき秋萩のおりてみをりて沖やかくらん
秋の田のしたほのやとのにはぶまで咲る秋萩みれとあかぬかも
朝かほの朝露をきて咲といへと夕かほにこそ匂ひましけれ
春されは霞かくれにみえさりし秋萩咲り折てかさゝん
人は皆はきを秋とはいふなれと尾花の末を秋とはいはん
玉鉢の君かつかひの手折たるこの秋萩はみれとあかぬかも
わかやとに咲る秋萩常ならは我まつ人にみせまし物を
我やとにうへて置たる秋萩をたれかしめさし我にしらせぬ
てにとれは袖さへにほふ女郎花此下露にちらまくもおし
わきも子か行逢のいねのかる時に成にける哉秋の花さく
恋しくはかたみにせんとわかせこかうへし秋萩花さきにけり
秋はきはかりに逢しといへればか声をたてゝは花さきにけり
秋されは妹にみせんとうへし秋露霜をきて散にけらしも
秋風に山とひこゆるかりかねのいや遠さかり雲かくれつゝ
天雲のよそのかりかね聞しよりいたく霜ぶりさむしこよひは
垣ねなるはきの花さく秋風の吹なるなへにかり鳴わたる
山ちかく家居をせれはさをしかの声を聞つゝもねかねつも
足曳の山より聞はさをしかの妻よふ声をきかまし物を
夕かけになく日くらしのこゝはくに日ことに聞とあかぬ君かな
秋風のさむく吹なるわかやとの浅ちかもとに日くらしもなく
かけ草の老たるやとの夕かけになく日くらしはきけとあかぬかも
神なひの山下とよみゆく河に蛙くなり秋といはゝや
庭草に村雨ふりて日くらしの鳴声きけは秋は来にけり
117 116 115 114 113 112 111 110 109 108 107 106 105 104 103 100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88

草まくら旅に物思ふわかきけはゆふかたかけになく曰くらしか
瀬をはやみ落滝つらし白波に蛙なくなり朝夕ことに
秋萩にをけるしら露朝な／＼玉とそみゆる置るしらつゆ
119 118
121 120
122 123
124 125
126 127
128 129
129 130
130 131
131 132
132 133
133 134
134 135
135 136
136 137
137 138
138 139
139 140
140 141
141 142
142 143
143 144
144 145
145 146
146 147
白露と秋の花とをこきませてわくことかたきわかこゝろかな
わからやとの尾花をしなみをく露に手ふれわきもこぢらまくもおし
此ころの秋風さむし萩か花ちらす白露をきにけらしな
この比の曉きつゆにわかやとの萩の下はゝ色つきにけり
雁かねはいまはきなきぬ我待し紅葉はやつけまではくるしも
秋されは置しら露にわかやとの浅ちかうへはいろつきにけり
一年にふたゝひゆかぬ秋山を所にもあらて過しつるかな
かり金の鳴にしとにもから衣竜田の山はいろつきにけり
さをしかの妻とふ山の岡へなるわさ田はからす霜はふれとも
わかやとのまもるたみれは沢のうらに秋はみつにて覚ゆるかな
此宵はさ夜ふけぬらし雁かねの聞ゆる空に月立わたる
わかせこかかさしのえたにをく露の清くみせんと月はてるらし
思はすに時雨の雨はふりたれと天雲晴て月は清きを
白露を玉につくるなか月の有明の月はみれとあかぬかも
恋つゝもいなはかき分いへをればともしくもあらす秋の夕くれ
萩の花咲たる野へは日くらしの鳴なるともに秋風そふく
秋山の木葉もいまた紅葉ねは今朝吹風は霜消ぬへし
秋田かるひたの庵りに時雨ふりわか袖ぬれぬほす人もなし
玉たすきかけぬ時たにわかこふるしぐれしふらはぬれつゝもこん
紅葉ゝを落すしくれのふるなへに夜さへそ寒き独しぬれは
たれかれと我をなとひそ長月の時雨にぬれて君まつ我を
住吉の岸を田にほりまきしいねのかるまでいもに逢はぬ也けり
秋の田のほのかにをける白露のすきにぬへくもおもほゆる哉
秋萩の咲ける野への夕くれにぬれつゝきませ夜は更ぬとも
さをしかの朝ふす小野ゝ草わかみかくれかねてか人にしられぬる

151 150
152 153
153 154
154 155
155 156
156 157
157 158
158 159
159 160
160 161
161 162
162 163
163 164
164 165
165 166
166 167
167 168
168 169
169 170
170 171
171 172
172 173
173 174
174 175
わからやとに咲る秋萩ちりはては秋にも逢ぬ身とや成なん
秋されはかりとひこゆる立田山立とゐるとに君をこそおもへ
なにすとか君をいとはん秋萩のその初花の恋しき物を
かりかねの初声ならて咲てちる宿の秋萩みにこ我せこ
さをしかの入野のすゝき初尾花いつしかいもが手まくらにせん
長月を君にこひつゝいけらすは咲て散にし花ならましを
秋の夜の月かも君は雲かくれしはしもみねは君そ恋しき
長月の有明の月の有つゝも君しきまさはわれこひんかも
はふりこかいはふやしるの紅葉ゝもしめをはこえて散くる物を
足曳の山ちもしらすしらかしの枝もたはゝに雪のふれゝは
夜を寒み麻戸を明て出ぬれは庭もはたらに雪降にけり
淡雪は今朝はなぶりそ白妙の杣木をほさん人もあらなくに
たか宿の梅の花そも久かたの清き月夜に残らさりけり
梅の花まつさく枝を折もちていとゝなつけく袖をみんかも
来て見へき人もあらなくにわかやとの梅の初花散ぬれとよし
淡雪のふるに消ぬへくおもへとも逢よしもなみ程そへにける
朝霧あひふりくる雪の消ぬとも君には逢んとわか帰り来る
わかやとに咲たる梅を月かけによなくきつゝみん人もかな
足曳の山下風はふかねとも君かこぬ夜はかねてさむしも
明日よりは若なつまんと片岡の朝のはらはけふそやくめる
梅の花それともみえす久かたの天きる雪のなへてふれゝは
わかやとの池の藤なみ咲にけり山郭公今や来なかん
たこの浦にて藤の花をみておもひをのふ
田子の浦のそこさへ匂ふふちなみをかさしてゆかんみぬ人のため
郭公なくやさ月のみしか夜も独しぬれはあかしかねつも
年に有て一夜いもに逢ふ彦星の我にまさりて思らんやそ
わきも子かあかもぬらしてうへし田をかりて納めんくらなしの浜
秋風の日ことにふけは久かたのをか木の葉も色つきにけり
我せこをわがこひをれはわかやとの草さへ思ひうらかれにけり
みかと竜田河のわたりにおはします御供につかうまつりて

竜田河紅葉ゝなる神なひの三室の山に時雨ふるらん
 逢ぬ夜のふる白雪とつもりなは我さへともに消ぬへき物を
 足曳の山下とよみ行水の時そともなくこふるわか身か
 時雨のみにはふれゝはまきのはもあらそひかねて紅葉しにけり
 青柳のかづらき山にゐる雲の立てもゐても君をこそ思へ
 水底におふる玉ものうちなひき心をよせてこふるこの比
 ことに出でいはゝゆかしみ山河の滝つ心をせきそかねつる
 風ふけば波うつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬへらなり
 曰のくもる雨ふる河のさゝら浪まなく人の恋らるゝかな
 たらちねの親のかふこのまゆこもりいふせくも有か君にあはすて
 恋／＼て後にあはんとなくさむる心しなくはいきてあらめや
 恋するに死ぬる物にしあらませは我身は千たひしにかへらまし
 こひ／＼て恋てしねとやわきもこか我家の門を過て行ぬる
 荒磯の外ゆく波のほかこゝろわれは思はしこひはしぬとも
 ますらをのうつし心も我はなし夜昼わかす恋しわたれは
 佗つゝもけふはくらしつ霞たつあすの春日をいかてくらさん
 恋つゝもけふは有なん玉くしけ明なんあすをいかてくらさん
 千早振神のいかきもこえぬへし今はわか身のおしけくもなし
 山のはにさし入月のはつ／＼に妹をそみつる恋しきまでに
 竹のはに置ぬる露のまるひ逢てぬるとはなしに立わか名哉
 なき名のみたつの市とはさはけともいさまた人をうるよしもなし
 なき名のみ立田の山のふもとにはよにもあらしの風もふかなん
 皆人のかさにぬふてふありますけ有ての後も逢んとそ思ふ
 ますかゝみ手にとり持て朝な／＼みれとも君にあく時そなき
 玉ゆらにきのふのくれにみし物をけふの朝にこふへき物か
 かくはかり恋しき物をしらせはやよそにみゆへくあらまし物を
 恋しとはこひもしぬとか玉鉢の道ゆき人にことつてもなし
 足曳の山より出る月まつと人にはいひて君をこそまて
 逢みてはいくひさゝにもあらねとも年月のことおもほゆる哉
 いわねふみかさなる山はなけれとも逢ぬ日かすを恋わたる哉

205 204 203 202 201 200 199 198 197 196 195 194 193 192 191 190 189 188 187 186 185 184 183 182 181 180 179 178 177 176
 226 225 224 223 222 221 220 219 218 217 216 215 214 213 212 211 210 209 208 207 206
 賴めつゝこぬ夜あまたに成ぬれはまたしと思ふそ待にまされる
 なる神のしはしは空にさしくもり雨もふらなん君とまるへく
 むは玉の今宵な明そあけ行けは朝ゆく君を待もくるしも
 さゝなみや志賀のから崎きたれとも大宮人の舟まちかねつ
 足曳の山鳥の尾のしたりをのなか／＼し夜を独かもねん
 千早振神のたもてる命をもたか為と思ふ我ならなくに
 網代木のしらなみよりてせかませはなかるゝ水も長閑からまし
 しら浪はたてと衣にかさならすあかしも須磨もおのかうら／＼
 あらちをのかるやのさきに立鹿もいとわかことに物は思はし
 題簽 建久二年
 「人丸家集 下」
 柿本人丸家集下

214 213 212 211 210 209 208 207
 206
 ほの／＼と明石の浦の朝霧に島かくれゆく舟おしそ思ふ
 なる神の音にのみ聞卷向の檜はらの山をけふ見つるかな
 いにしへに有けん人も我ことやみわのひはらにかさし折けん
 よそにして雲井みゆるいもか家にはやくいたらん歩めくろ駒
 猿沢の池に身をなげたる采女を見てよめる
 わきもこかねくたれかみをさる沢の池の玉もとみるそかなしき
 みか月のさやけくもあらす雲かくれみまくそほしきうたて此比
 まさしてふやそのちまたにゆふけてふうらまさにせよ妹に逢よし
 空の海に雲の波たつ月の舟ほしのはやしにこきかへるみゆ
 ちゝに人はいふとも人はおりつかんわかはた物にしろきあさきぬ
 せんとう歌
 ますかゝみゝしかと思ふいもに逢んかも玉のをたえたる思ひ茂此比

228	夕されは秋風さむしわきも子か時洗ひ衣ゆakteはやきん		
229	おほなむちすくなひかみの造れりし妹背の山をみるかうれしき		
230	式たへの袖かへし君玉たれのおちに過たる玉もあかんやは		
231	卷向の山へひゝきて行水のみつの淡こと世 <small>セ</small> をはわかみる		
232	秋田かるかり庵つくりわかをれはころもて寒し露を置ける		
233	やたの野に浅ち色つくあらち山みねの淡雪寒くそ有らし		
234	ふる雪の空に消ぬへくおもへとも逢よしもなし年そへにける		
235	あからさまに京ちかき所に下りけるを、とくのほらんと		
236	思ひけれど、いさゝかにさはる事有てえ上らぬに、正		
237	月さへふたつ有ける年にて、いと春なかき心ちしてな		
238	くさめかてらに、此世に有國くの名をよみける、これなんる		
239	中にまかり下りつるとて、有やんことなき所にたてまつり		
240	けるなん		
241	畿内五ヶ国		
242	山河の石間を分てゆく水はふかき心もあらしとそ思ふ		
243	春たては梅の花かさ鶯のなにをはりにてぬひとゝむらん		
244	あた人のことにつくへき我身かはしらはやよそに恋してふらん		
245	とほたあふみ		
246	ひねもすにとほたあふみに種まきてかへる田長はくるしかるらん		
247	するか		
248	ふしのねのたえぬ思ひをするからに常盤にもゆる身とそ成める		
249	いつ		
250	逢ことをいつしかとのみまつ島のかはらす人を恋わたるかな		
251	かひ		
252	すまの浦につるのかひこの有時はこれが千代へん物とやは見る		
253	さかみ		
254	あしからのさかみにゆかん玉くしけはこねの山の明んあしたに		
255	武さし		
256	しほりせんむさして尋ねよ足曳の山のをちにて跡はとゝめつ		
257	あは		
258	春の田のなはしろ所造るとてあはけふよりそ閑ははしむる		
259	かむつぶさ		
260	とめゆかんつぶさに跡はみえすともしかのはかりはしると云なり		
261	下つふさ		
262	木末しもひらけざりけり桜花下つぶさこそまつは咲けれ		
263	ひたち		
264	いつしかと思ひたちにし春霞君か山ちにかゝらさらめや		
265	東山道八ヶ国		
266	あふみ		
267	なかれあふみなどの水のむまけれはかたへもしほは味き成けり		
268	みの		
269	散ぬともいかてかしらなん山桜春の霞のたちしかくせは		
270	伊勢		
271	二葉より引こそうへめみる人の老せぬ物と松を聞にも		

- 255 わたつうみの沖にこちかせはやからしかのこまたらに浪たかくみゆ
ひた
- 256 さしてゆく三笠の山し遠けれはけふは日たけぬ明日そいたらん
しなの
- 257 あたなりといひそめられしぬれ衣はひしなのみこそ立まさりけれ
かんつけ
- 258 音に聞吉野のさくらみにゆかんつけよ山守花のさかりを
しもつけ
- 259 春きぬと人しもつけすあふ坂の夕つけ鳥の声にこそしが
陸奥のくに
- 260 いつかおひむつのくむあしをみる程は難はの浦もなのみとそ思
いては
- 261 夕やみはあなたほつかな月影のいてはや花のいろもまさらん
北陸道
- 262 春たてはわかさは水につむせりのねふかく人を思ひぬるかな
ゑちせん
- 263 しか山をこえゆく人をつらつゑちとせまたすと聞は誠か
か賀
- 264 をのかかゝあけゝる物を花といへはひとつにほひに思ひけるかな
のと
- 265 咲けはかつちりぬる山のさくら花こゝろ長閑に思ひけるかな
ゑちう
- 266 花の末ちうにまさりてにほひせはそれをそ人は折てとらまし
ゑちこ
- 267 人にゝすさかなき親のこゝろゆへちこさへにつゝおもほゆるかな
さと
- 268 東路のもろこし里におりてたつ絹をやから衣とやいはん
山陰道
- 269 はりま
- 270 春雨には水こそまさるらしたはたゝき聲音たかく成
たちま
- 271 鶯の声をほのかにうち鳴ていなはいつれの山をたつねん
いなは
はゝき
- 272 山きはゝきよくみゆれと天津空たゝよふ雲の月やかくさん
いは見
- 273 夜とゝもに波なき磯のいはみれはかたへそかはく時は有ける
おき
- 274 草のはに置るる露の消ぬまは玉かとみゆることはかなさ
いつも
- 275 程もなく今朝ふる雪の朝またきいつもと云は空ことか君
山陽道
- 276 立かはりますたの池のうきぬなはくれともたえぬ物にそ有ける
みまさか
- 277 君かみまさかなく常にはなれつゝわか花園をふみしたくめり
ひせ
- 278 常盤山ふたはの松の年をへてくひせにならん年をみてしか
ひちう
- 279 枝ひちうきて身さへそなかれつるわりなき恋のあはぬ涙に
ひこ
- 280 日比へてみれともあかぬさくら花風のさそはんことのねたさよ
あき
- 281 鶯のあきて立ぬる花のかを風のたよりに我はまつかな
すはう
- 282 水鳥の立るてさはく磯のすはうかへる舟そよそに過ける
なかと
- 283 海のなかときはに入てかつく蟹も人にあはひはともしかりけり
たは

南海道

きのくに

284 朝みとり野への青柳いてゝみん糸を吹くる風はありやと
あはち

285 わかちかふことをまことゝ思はずはあはちはやふる神にとへ君
あは

286 こすゑのみあはと見えつゝはゝき木のもとを元よりみる人そなき
さぬき

287 我はけさぬきてかへりぬから衣夜のまといひしことをわすれす
伊与

288 はかなしや風にうかへるくものいよこゝろほそくも空にわたれる
と佐
ちくせ

289 みなとさる舟こそけさはあやしけれ日たけて風の吹てかへるに
西海道

290 たみちくせにつくれといひやらんましき若菜も生はつむべく
ひせん

291 人をこひせめて涙のこほるれはこれたかゝたの袖そぬれける
ひこ

292 たれしかも我をこふらん下ひもの結ひもあはすとくる日比は
ふせ

293 春の野にきのふうせにし我駒をいつれのかたにさして求めん
ふこ

294 花にてふこゝにてつねにむつれなん長閑からねはみる人もなし
ひうか

295 逢はぬこひうかりけりとと思ひぬる身をはこかせと印なけれは
おほすみ

296 我やとにおほすみ山のいかなれは秋をしらすてときは成らん
さつま

297 春の野の花をくさ／＼つまんとてさも形見をもつくりつる哉

ゆき

298 ゆきかよふ雲井は道もなき物をいかてか雁のまとはさる覧
つしま

299 山河にみつまさらは水上に積る木の葉ゝおとしはつらん

建久二^{壬子}年

注

至文堂・昭和三十六年刊。

和泉書院・平成十五年十月刊。

朝日新聞社・平成十七年六月刊。

風間書房・平成十六年九月刊。

5 『冷泉家時雨亭叢書七二巻 素寂本私家集 西山本私家集』(平成一六年一月・朝日新聞社刊)所収の『人磨集 清譽本』(解説は竹下豊氏)。書陵部藏(五一〇)。

6 『新編国歌大観』(第三巻・私家集編I・昭和六〇年五月・角川書店刊)による。
なお、底本は書陵部藏(五〇六・八)本である。解説は、片桐洋一氏・山崎節子氏。7 『冷泉家時雨亭叢書六八巻 擬定家本私家集』(平成一七年二月・朝日新聞社刊)
によれば『猿丸集』など「三十件三十一点伝存している」という。その中に『人磨集』は含まれていない。8 『人磨集諸本の成立』(『国語国文』昭和五六年七月)
9 『人磨集全釈』(風間書房・平成十六年九月刊)

10 『柿本人麻呂異聞』(和泉書院・平成十五年十月刊)。

11 注10に同じ。

あとがき

この稿をなすに当たり、宮内庁書陵部、そして慶應大学斯道文庫の佐々木孝浩氏には多大な援助を受けたことを記して、御礼申し上げる次第である。